

秋季巡検報告：富士山南麓の火山地形をたずねて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北川, 光雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025712

秋季巡検報告

富士山南麓の火山地形をたずねて

北川 光 雄*

第30回地学野外観察会は富士山南麓の溶岩流等の観察をもとに、富士山をより理解する会として実施された。吉原駅北口に集合、自家用車に分乗して出発、まず吉原駅北方の沼川ほとりで今日の案内者小川賢之輔会員より富士山の形成とその周辺地域の発達史的な説明があり、参加者は今日のコースの概略を富士の雄姿を目前にして把握することができた。また越前岳から愛鷹山にかけて鋸歯状の稜線を見ている愛鷹連山についてもその性格を教えられた。

第一の観察地点は愛鷹南麓、江の尾の露頭で、愛鷹山の旧期玄武岩溶岩のうちの中中部凝灰角礫岩とその上の愛鷹ロームの模式的断面であった。カンラン石、キ石をふくむ玄武岩は流動性を持ち、その火砕流が広い範囲に分布するという。愛鷹ローム層は箱根や富士起源のもので表面の色調、クラックのもよう、構成物質によって3部に区分できる。表面の黒色土層はクロボクとよばれる火山灰層であること、上部ロームの上部には縄文早期に相当する休場層があり、噴出の時代決定に文化遺跡が役立つことなどを示している。またこの地点では加藤芳朗会員から従来の火山の研究は岩石学的調査が中心課題であったが、それとともに火山灰を層序的にあつかって火山活動を解明するテフクロロジーの方法もとられていることについて解説があり、箱根パミスやオレンジパミスのような鍵層になるものの確認の重要性とあわせて、露頭観察についての示唆を与えられた。火山灰や岩石を採取する会員もおおかった。

第二の地点は花川戸で、そこは富士山と愛鷹山の境界を南流する赤淵川を富士岡からややさかのぼった地点である。赤淵川は溶岩流の上を侵食して流下するので滝や峡谷状の地形を示し、河床にはおおくのポットホールがみられ、花川戸の滝や溝状のポットホールは自然の造形の美しさを教えてくれた。ここにみられる岩石は新富士火山の旧期玄武岩質溶岩の大淵溶岩で暗灰～黒灰色、多孔質でシャチュウ石、カンラン石をおおくふくむことなどが特色であり広い分布をもつ溶岩流であることも知らされた。

花川戸から赤淵川をややさかのぼった鵜無淵が第三地点で、ショーレンドームの観察をおこなった。これは溶岩塚ともよばれる溶岩流の作る特異な地形で、流下の末端が塚あるいは小さな丘のようにもちあげられてできるもので溶岩の温度差から生ずる固結の状況や運動によって形成されることを教えられた。この地点のものは曾比奈溶岩の上に勢子辻溶岩が流下した末端にできた例であり、何気なくみすごしてしまいがちな現象であるが富士南斜面にはこの例はおおく、小川会員が踏査や読図で確認された423カ所については“富士市域における富士愛鷹両火山の地質および火山地形学的研究”の付表として一覧表に示されており、その丹念な実地調査をふまえた業績に敬服するとともに、自然を学ぼうとしている私達にとっては指針を与えられた感をもたされるものであった。

道路事情や車の台数の多いことで先導車をみうしない、ちょっとまごまごしたが一同無事に第四地点の丸火自然公園に到着した。休日のおひるとあって一帯は相当の混雑であったが、昼食休憩をとった。公園内には自然館も建設されており、富士山の自然を知るための動植物岩石などの標本やパネルが展示さ

* 静岡英和短大

れていて有益であった。今後は更に資料も整備拡充されるとのこと、近くの少年自然の家とあわせて理科教育の場となることを期待したい。丸火はまろびともいい、溶岩が転びながら流下してきたこと、人が歩いていてろびやすいことなどに語源があるといわれるが、新しい時代の噴出物で火山灰がその上に堆積していない点が特色で、北斜面の青木原もこれに類し、寄生火山を噴火口にして局地的に分布している。ここの大淵丸火溶岩は南北方向に細長く分布し、縄状溶岩、溶岩樹型、溶岩トンネルなどの特殊な地形ももち、公園にもその例がみられた。展望台からは富士、伊豆、日本平方面と360度の眺望にめぐまれ、特に紅葉の美しさは格別で自然のゆたかさを十分に満喫した。丸火の部分は表層土壌未発達のため周囲とは明瞭に植生の差があるためにその輪郭を知ることができた。またこの周辺にはラバボールとよばれる球状溶岩が散在するが、そのあるものは盗難にあったとか。自然を保護し育てる心を持ちたいものと改めて考えさせられた。

丸火公園をあとにして裾野の斜面をさらにのぼり、林道境塚線にそった径路をとり、小天狗溶岩と東臼塚溶岩の接する、標高 940 m ほどの第五地点に到着した。これまで津屋博士によれば小天狗が上位、東臼塚が下位の関係とされていたが、この地点の露頭では東臼塚溶岩流が小天狗溶岩流の上位を不整合におおっており、従来に関係に若干の訂正を加える必要のあることを説明された。このことはなお検討の必要もあるのでカラーの空中写真をもとに今後も調査をされる予定とのことである。

第六地点は大淵丸火寄生火山噴火口で今日の見学地点であり、第五地点の西方、境塚線の北に位置している。上方から火口をみおろしたが表面は雑木や草でおおわれており、凹状の形態も確認でき、説明をうけて一同納得したようであった。空中写真では円形のスリバチ状の寄生火山の火口が形態的に知られるが、周囲に噴出時の堆積物、スコリアなどがみあたらないため火口については問題がおおい。また形態的に噴火口は2つあって、それぞれの噴火口からの噴出物の差異が不明であるが東のほうに先に活動し、西のほうがあとで形成されたものであるらしい。溶岩は日本ランド溶岩の上を流下して丸火公園に達しているが、噴火口付近の地形についての考察には空中写真の判談による補足が必要となってくるようである。この地点からは駿河湾をはさんで伊豆半島と駿河湾西岸の山や丘陵がよくみわたせ、駿河湾から奥にのびる南北性の地溝帯に位置して活動しつづけてきた富士山がなんとなく理解できるような気もしてきた。個々の溶岩流や火山灰の観察をもとにした微視的側面と全体のスケールをみわたす巨視的側面とが自然の勉強には不可欠であることをめいめいが頭の中にきざみこんで、曾比奈、大淵を経て富士への帰途についた。

これまで断片的で不十分な知識しかなかった富士山の発達跡をたどった今日のコースは新しい目を富士に対して開かせてくれた。周到な準備と豊富な経験をもとに懇切な指導をいただいた小川会員と加藤会員に一同、深く感謝の意をあらわし、お礼申し上げます。 参加者 34 名



鵜無淵ショーレンドーム



沼川ほとりにて